

いのち 生命のにぎわい通信

第23号：発行 平成24年(2012年)8月

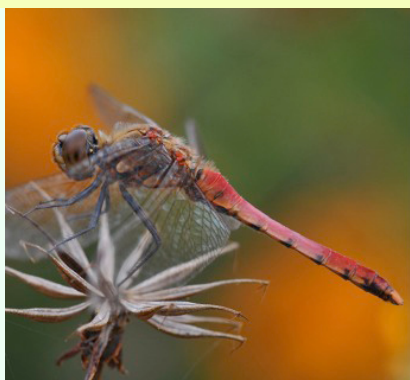
初秋の風物詩アカトンボを見分けよう

アカトンボは、初秋の生きものとして馴染みが深く、童謡にも歌われています。「アカトンボを発見した」との報告が多いのですが、実は「アカトンボ」という種名のトンボはいません。赤いトンボは、アカネ属(＝アカトンボ属)だけでなく、他の属にも赤くなるトンボ(ウスバキトンボ、ショウジョウトンボ)がいます。見分ける特徴は、翅の色づきや縁紋、胸部を横から見た模様です。成虫は生息場所も住み分けており、アキアカネは夏の暑さを避けるため高原へ登り、マイコアカネは草地に隠れ、ノシメトンボは林の縁にいます。幼虫ヤゴの生息場所となる水辺環境の改変により、県内でも、普通にいたこれらのアカトンボが減少してきています。

アカトンボの仲間(トンボ科アカネ属) ＜翅の先端が透明なタイプ＞

「a0***」は写真撮影者の調査団員番号

(A) 最重要保護生物：千葉県レッドデータブック、「BDC」は当センター職員が撮影



アキアカネ

a0261

県内全域に生息し、主に水田周辺やプールで産卵・生育する。夏には高原へ上がって過ごし、涼しくなると平地に降りる。胸部中央のラインが上に尖る。成熟すると腹部のみが赤くなる。



ナツアカネ

a0261

県内全域に生息し、主に水田周辺やプールで産卵・生育する。胸部中央のラインは四角く切れ、腹部と胸部から頭部まで全身が赤くなることで、アキアカネと見分ける。



マイコアカネ

a0261

やや小型で、県内全域に生息し、近くに草地や樹林のある水田周辺に多い。腹部は鮮やかな赤、頭部は鮮やかな水色で、「舞子」に見立てて命名された。低い位置に止まることが多い。



ムタテアカネ

a0512

県内全域に生息し、谷津田環境を好み、市街地や都市公園では見られない。薄暗い林縁部にいるため、見つけづらい。顔面に眉状斑があり、「ムタテ」という。成熟すると腹部のみが赤くなる。オスの腹部の腹端は反り返る。(メスは、翅の先端が黒くなるものもある。)



ヒメアカネ(A)

a0466

小型であり、湿地に生息するが、生息地が限られており、数が少ない。赤くなるのは腹部のみ。腹部上面の黒線が目立つ。数が少ない上に、小さいため見つけづらい。捕獲したりせず、生息地である水生植物の多い谷津田等の保全が大切である。



ネキトンボ(A)

a0389

翅の付け根がはっきりと橙赤色になるため成熟個体はショウジョウトンボと似ている。胸部側面に太い黒線が二本あり目立つ。林に囲まれた深さのある池を好み、学校のプールで発生する事もある。県内では安定した産地が少ないため、生息地の保全が大切である。

アカトンボの仲間<翅の先端が黒いタイプ>

(B) 重要保護生物、(D) 一般保護生物：千葉県レッドデータブック



ノシメトンボ a0261

県内全域に生息する。翅の先端が褐色である。オスは成熟すると黒がちの赤になる。6月から見られ10月遅くまで活動している。水辺から離れた公園等でも、最も多く見られるトンボである。林の縁など薄暗い場所に生息する。



コノシメトンボ(D) a0512

県内全域に生息しているが、数は多くない。オスは腹部が赤くなる。ノシメトンボは胸部のラインが直線なのに対し、本種は後方の2本が繋がる事で見分ける。ノシメトンボより暗い場所を好むため、見つけづらい。



リスアカネ(B) BDC

オスとメスの一部は腹部が赤くなる。翅の先が黒く、胸部はナツアカネに似る。林に囲まれた日陰のある池に生息する。県内各地で記録があるが、安定した産地は減少している。

夏から秋は、生命のにぎわいに満ちています。生きものの報告を待ってます！！



カダヤシ(特定外来) a0189



メダカ(B) a0067

メダカとカダヤシは、ヒレの形で見分けられ、水面からの観察では見分けにくく、側面から確認します。卵胎性で仔魚を産むカダヤシはメダカ等を駆逐するため「特定外来生物」に指定され、運搬、飼育、放流は法律で禁止されています。販売されているヒメダカや、他地域のメダカは、遺伝子が違うため、池や河川に放さないでください。



ナガサキアゲハ(オス) a0582

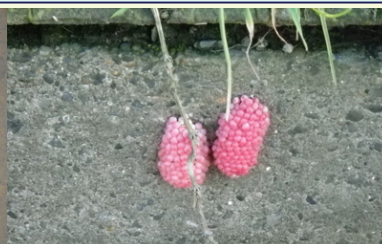


ナガサキアゲハ(メス) a0582

ナガサキアゲハは、大型の黒いアゲハチョウの中でも、後ろ翅の尾状突起が無いのが見分ける点です。温暖化の影響で、生息域を拡大し、北上している南方種であり、大きくゆったり飛ぶため非常に目立ち、10月ころまで見られます。幼虫はミカン科の果樹の葉を食べ、他のアゲハの幼虫とは体の模様の色等で判別できます。



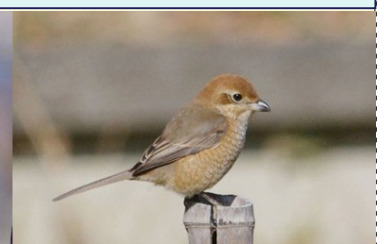
スクミリンゴガイ a0049 スクミリンゴガイ(卵塊) a0512



スクミリンゴガイは「要注意外来生物」であり、九十九里地域で生息域を拡げています。水稻や水草を食害するので、濃いピンク色の卵を水中へ落として防除し、貝は除去するか耕耘時に砕きます。

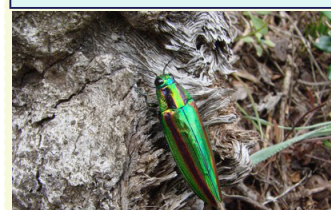


モズ(オス) a0512



モズ(メス) a0285

モズは、平野部から標高の高い高原へ行くようになったようで、県内では夏の観察は少なくなっています。百舌鳥の由来は、他の鳥の鳴きまねが上手く、秋の縄張り宣言は高鳴きといわれます。



ヤマトタマムシ a0034

調査対象であるヤマトタマムシ(D一般保護生物)は、数は多くないですが、県内全域に生息しています。きれいな緑色の金属光沢のある美しい昆虫で、この光沢は鳥に獲られないためにあるそうです。成虫はエノキやケヤキの葉を食べ、幼虫は、朽ち木に潜って生長します。

<お願い>

外国産の生きものや国内の他地域で採集した生きものは、野外に逃がさないでください。

県内にもともと生息してる生きものと競合したり、交雑してしまうことがあります。

<これから観察できる生物と季節報告>

リンドウとヒガンバナ(開花)、モズ(秋の高鳴きの初鳴き)、各種渡り鳥 * 調査対象種以外の報告には、写真を添付願います。

希少生物(生息・生育数が減少している生物)や外来生物(特定外来生物・要注意外来生物)の情報を集めています。